

に往かれる■一たい朝飯前に寫生にゆくなんて事は僕等の思ひも及ばなかつた仕事だ■西照館の夜廻りは拍子木でもなく、大鼓でもない、鐵棒でもない、一層ハイカラに學校や停車場で使用する大きなペルを振るとは驚いたろう■何だか直ぐ瀟車が出そうて、又學校が初まつたやうにも思はれて氣忙しない■西照館の小さな娘が自分を描いて貰いたいといふて盛装して來たが、人物と來ては一同閉口頓首■そのくせ風景もあまり上手でもないくせに■西照館に泊つて共同生活の趣味が判つた■一生懸命に水貼をやつてゐる最中電燈の消えたのには一同大狼狽を極めた■最初の懇話會には皆遠慮勝で格別面白くはなかつたが第二回目の寄宿舍茶話會は大に振つた■J、S君の動物園は大喝采■東京上りの瘦せた鶏もよかつたが、ノラリクラリの大蛇も愉快であつた■チンチユー君はどう見ても坊主だ、何かお經でもやつてはドーか■S、I君の筑前琵琶はよかつたれ■よく食ふたもので飯櫃を三度代へさせたともある■漬物は奪ひ合だ■お菜はちと少ないが料理屋たけ材料の新しいのはよかつた■料理も中々上手のやうだ■満員で斷つたゝめ他に下宿してゐる人の話では、食物は實に酷いとさ■蚊帳に穴があつて一晩苦しめられたゝの話もあつた■吾等の寄宿所はいろゝの不便もあつたが、兎に角又と得られぬ立派な家で、この位ひなら満足せればなるまいて。

神 秘 錄 (一)

□神秘と言ふのは瀧の方の流行語だ□第一着、失策は兩先生の
前橋行である□長野では發起人らしい人が車窓を覗いては彼方
此方をキヨロ／＼してゐた□宿屋の名の塵表聞は振つてゐる□
名前は振つてゐたが食物には閉口した□流石の晩雪も不平が
出た□併し景色は變化が多くつて結構であつた□潤満の瀧、人
間未到の地へ出懸て往て大冒険をやつた女丈夫がある□背の君
がついてゐたからさ□藤蔓へつかまつて石へ足を掛けたら其石
がガラ／＼と落ちた女丈夫は中ブラリン、上からと下から引
上げ押上げて漸く崖の上へ登つた□ソレで御當人は神色自若
□傍て見てゐるものは顔の色が變つた□新聞で自分を素ッば抜
かれて急に金が多くかゝるといふて困つたのは○○子爵の君□
ソレは／＼御愁傷さま

紹 介

◎日蓮上人(三版)山崎紫紅著

日本橋本町 金 港 堂

菊半截 二八〇頁 三十錢

著者の信仰せる日蓮上人の高徳偉業を讃したる新體詩にして、
附録として『對露の歌』を添へたり、文字雄渾、歌ふところ極め
て熱烈、眞面目にしてよく日蓮其人を活躍せしむ、信仰者にあ
らざるも此詩によつて大なる感興と利益とを受くるならん。